



「その人」には 「やりたいこと」がありました

～ 目指したいことは目に見えることのその先に ～

校長 鈴木 和枝

今年の夏も、心に残る出会いがありました。それは、日本の南のある場所
で「県内の高等学校一校一校を魅力あふれる学校にする」ということを
目指し、様々な取組にチャレンジしている方との出会いです。その出会い

は、「心に残った」というより「心が揺さぶられた」と言った方がぴったりくるような気がします。なぜ、そのような気持ちになったのかというと、「心の底からやりたいと思っていることをもっている、その実現のために必要な様々な課題の解決に一つ一つ取り組んでいる」、さらにその「心の底からやりたいと思っていること」の目指すところが、「目に見えるもの、こと」「成果」だけではなく、人々の心への深い示唆に富んでいるということです。ゴールは限定的なものではなく、人々への影響力とでも言うのでしょうか。さて、ここではその方をAさんとして、この先を進めていきたいと思います。

Aさんは元々は関東で勉強をされて、お仕事もされましたが、あるときに移住することを決め、南の地に移られました。移住した地で、その地域の魅力、その土地ならではの魅力を感じながら生活されていたAさんは、その地に生まれ小学校、中学校と義務教育時代を過ごした子どもたちの多くが、地元を離れていく現実、過疎が急速に進んでいることを知ります。Aさんは、その地域にはその地域ならではの素晴らしい伝統や文化があり、温かい人と人とのつながりがある・・・子どもたちが地域の大切なものから学び、さらに発展させていく・・・そうしたことができたなら、地域も人も元気に、そして幸せになるのではないかと考えました。Aさんは、県内全ての県立高等学校を「子どもが通いたくなる、保護者も通わせたい」ことを目標に、高等学校をより一層魅力あるものにすることを目指します。それは自分一人では到底なく、そこには学校（県立高等学校）と地域（地域の人、企業、NPO、卒業生や大学生）が協働することが不可欠、さらには県（行政）が積極的に関わることも重要と考えました。

高等学校としては、地域と協働することで、その学校でしか学ぶことができない教育実践を展開することができ、よりよい学校づくりが為されていきます。地域としては学校と協働することによって地域で子どもたち（全国各地からこの地域に「留学」している高校生もいます）を育てることとなり、その結果地域人材の育成、地域への愛着の醸成、さらには地域の活性化につながります。Aさんは、県内高等学校の魅力化を通じて大きな好循環を創ってきました。

「ひぎまいの和」7月号では、「楽しい」という感情が生まれる条件として、三つの欲求（自分で選んでいる、自分の意思で行動しているという「自律性」、自分にもできる、自分は成長しているという「有能感」、周りの人が自分を理解してくれている、協力できる、自分はここにいてよいと思える挑戦や学びに向かう環境である「関係性」）があると記しましたが、この方はほんとうに楽しそうでした。でも、その楽しさは、「高等学校を魅力のあるものにすること」に留まるものには見えませんでした。「このままだと将来よくないことになるな。」「こうだったらよいのにな。」「こうしたいな。」を様々な人と共有して、その解決のためにチームを組んで「こんなことをこうやっていこう!」というムーブメントを起こし、将来を考えた上で課題を乗り越えていく中で、みんなで地域の未来を創っていく動き、うねりが生まれていること、そこに深い楽しさの手応えを感じているように見えました。

さて、ひざり舞岡小学校はどういう姿を目指す学校か、子どもたちの何を強み、何を課題と捉え、どのような子どもたちを育てていこうと考えるか、そうした「願い」について、子どもたちはもちろん地域、保護者の皆さまとも教職員一同考えていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



「こうしたいな」と
考えて表現する子
どもたちです。

2025/08/26

すべては子どもたちのために ～ 「本気でがんばる」から楽しい、「簡単に思うようにはならない」から楽しい～